

阿部 昭

変哲もない一日

変哲もない一日

阿 部 昭

河出書房新社

変哲もない一日

昭和五十九年八月十五日 初版印刷
昭和五十九年八月二十四日 初版発行

著者 阿部 昭

装幀 大沢昌助
カット 大沢昌助

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十二
電話 編集〇三―四〇四―八六一一

営業〇三―四〇四―一二〇一

振替口座(東京)〇一〇八〇二

印刷 三松堂印刷

製本 小泉製本

©1984 AKIRA ABE

定価はカバー・帯に表示してあります

ISBN 4-309-00378-8

変哲もない一日

四時半にはもう蟬が啼いている。鳥はもっと早くから鳴いているにちがいない。むろん虫は夜もすがらだろう。夏の明け方、人間どもは鳴りをひそめていても外は結構にぎやかなものである。

こちらは寢床の中で、早起き鳥は虫を捕ふなどという英語を思い出したりするが、私は鳥じゃないからつかまえない虫もない。これという予定もない。けれども目が覚めたついでに起きてしまう。あと一、二時間眠りたいと思っても仲々うまく行かないのがわかってるし、不十分は昼寝でもして帳尻を合せればいいぐらいに思っている。

よくもぎたての胡瓜やトマトをくれる近所の半農の家の奥さんが、「毎朝起きて畑を一回りするのが楽しみ……きょうはどんないいものが生なってるかと思って胸がわくわくする……」

と家の者に言つたそうだが、そういう人は仕合せだ。自然はそういう人にはちゃんと目に見え
る恵みを投げて寄こす。

私のような生活をしている者は、日夜丹精している作物に我ながらびっくりしたり目を細め
たりという経験にそうそうぶつかるものではない。畑ならぬ机上の原稿用紙に書きさしの数行
を目にして、「これから先をどうしたものだろう」と、少々ゆううつになる位が関の山である。
早起きしたお蔭でひょっといい考えが浮ぶこともないではないが、日が高くなるにつれて雲散
霧消してしまふ程度の迷案であることが多い。それに唯の考えでは畑の胡瓜やトマトにかなわ
ない。とれたての魚にもかなわない。漱石は弟子に宛てた手紙で秋聲の新聞小説を褒めて、
「文章しまつて、新しい肴の如く候」と書いている。私のこの雑文もせいぜいスーパ一の冷
凍やパッケージの魚にならぬよう心がけたい。

それにしても毎年、今時分、私は湿気にやられるのか心身ともに不調で苦しむ。気も散るし、
何をするにも億劫で捗らず、きょうも一日空しく暮してしまつたという風になりがちである。
草木のほうは一と雨ごとに増長して、野蠻ないきれがむんむんするから、庭に出てももう春の
ようではない。頭上に蔽いかぶさるいぬアカシヤの枝葉などいかにも暑っ苦し、うっとうし
く、自分の頭もついでに散髪したくなるようだ。そうして海の風がまたひどく生ぐさい。シャ
ツを通して肌にくべとつくようで、部屋のうちこち、家具など手を触れてみると実際べたべたす
る。植物と海水の猛威かくの如しである。

こういう環境では若い連中は、いやあまり若くなくても、とかくむしゃくしゃが嵩じて、喧嘩腰になったり、車を暴走させたり、通行人を刺したりしたくなっても不思議はない。その点、私の住むこの海岸は休日にはことに物騒で、轢き逃げされた子供の話も聞くし、私自身車に突っ掛けられそうになったことも一度や二度ではない。夜の散歩にも相当の用心が必要である。要するにこれから二た月ばかりの間、海辺の住人はサーフィン族暴走族何々族、一とからげにしてアニマルの蝟集を遠巻きに眺めて、小さくなって暮すのである。しかし、それはそれで私にはいっそ都合でないこともない。

ざっとそんなような場所で私は書く。変哲もない一日、と題した訳は読んで字の通り、私は何の変哲もない暮しをしているからで、いつもの伝でふと浮んだこれを題名に掲げることにした。省みて変哲もないというのは決して誇張ではないと思うけれども、また変哲が無さすぎるとも思うけれども、そこに多少の意義を見出したいというのが私のひそかな願いである。そして私はこれをまず読者への手紙として書きたい。この欄を休んで一年以上になるから、あいつは近頃どうしているだろうと思っている読者も少しはあるかも知れないと自惚れて、しばらくまた同じ場所を借りて書くことにしたい。

手紙といえ、私の書いたものを読んで地球上の一番遠い所から便りをくれた人は、スペインのセヴィリアに住む日本女性Tさんである。地図を開いて物差しで測ってみた訳ではないが、たぶんそういうことになるだろうと思う。

Tさんがどういう経歴の人か、彼女の顔も年齢も勿論私は知らない。スペイン舞踊の勉強にギタリストの夫君と彼地に留学して久しく、あと何年かいるつもりだが、あるいは永住するかもしれないという、そういう女性である。私の知合いには見当らない、そんな珍しい読者の手紙がどうして拙宅の郵便箱に舞込むことになったか、その経緯は省略するけれども、これも活字というものの有難さと言う他はない。

Tさんは、私が昨春ちょうど病気で倒れた直後に第一信をくれて以来、何度かAEROGRA-MAや絵葉書をくれた。私が切手蒐めに熱を上げたのは遙か中学生の昔であるが、送られてきた航空書簡や切手の意匠を見るに、スペインの郵政省は仲々派手好みのである。

残念ながら、踊りの世界のことは私にはさっぱりわからない。だが最近の便りでは、——昨年からずっとスランプに苦しんできたが、きょうは新しい踊りの振付けで一寸いいのが出来たので得意になっている所です等と書き起されている。大変な勉強家、頑張り屋らしいことが想

像される。昨年父君が急死した際も、帰心をこらえて、齒を食いしばって稽古に励んだというTさんである。その時ほど日本が遠く思えたことはなかったとは、彼女の最初の手紙にも書かれてあった。

ところで、この春マラガで仕事をした後、セヴィリア（「セビージャ」と書いてある個所もある）に家を買った。日本のマンション程度のもので、日本では頭金にもならぬお金で買ってしまうので、高い家賃を払うよりはいいだろうと思いついて買った。小さいながらも自分のスタジオも出来て、踊りを教えている。セヴィリアの郊外にも新しくアカデミア（何々学院といったので、今はこのアカデミアが成功することを心から祈っている）。

フラメンコを始めて十年になるが、これだけやっているとはスペインでもプロとして中位の所にランクされる。日本には、自分よりずっとずっと下のほうの人でもスペイン人だというだけで契約が来て、東京のタブラオ（フラメンコの舞踏場をそう言うらしい）に働く人達がいる。「本場のスペイン人」という訳だが、その踊り子に自分が振付けをしているのだから皮肉なものだ。なにしろ日本人は外人が大好きなので云々——とあり、私もさもありなんと思った。と同時にそういうTさんの苦闘ぶりが少しは察せられるようにも思った。

Tさん夫妻が住んでいるトリアーナという地区は、昔からジプシーが多く住み、フラメンコのメッカとして知られ、セヴィリアの中でも最もセヴィリアらしい粋な風情に富む、明るく活

氣に満ちた一角である由。朝の市場がすばらしい。初めは豚の頭だの牛のレバーの大きいことだのに怖気づいて買物が出来なかったが、今では東京のマーケットのバック詰めの肉なんか買えないだろうと思う。百メートル程の通りの両側が全部八百屋で、びかびかのトマト、林檎、梨、大きなオレンジ等が山と積まれていて、面白いほど安い。つぎの通りは今度は肉屋ばかり、鳥の専門店には見たこともない野鳥まで吊してある。兎でも何でも売っている。そしてまたつぎの通りは活きのいい魚ばかりで、山のような海老や蟹がまだごそごそ動いている。それらを冗談を言っただけたりしながら買物をするのです、とある。

Ｔさんは、毎日々々スペイン語の中でばかり暮らしていて、少し日本語がおかしくなってきたので、こうして文字を並べていても変な表現が飛び出して来そうで不安だと書いている。拙い文章で手紙を出すのはとても氣がひけるとも書いている。そんなことはちっともない。事物の精彩、心の感動を伝えることにかけては、かえって日本語の中でばかり暮らしている私のほうがずっと心許ない状態にあると言ってもいいからである。

異国の強い香氣を運んでくるＴさんの便りは、それだけで毎度私を楽しませてくれた。だがそれにもまして私が心から驚き入った事がある。それは彼女も彼女の御主人も実に日本語の活字に飢えていて、たまに手に入る日本の雑誌は広告まで暗記するほど読んでしまうということ、最近は何れも送られて来ないので「主人など国語辞典を見ているという有様です」というくだりだ。そんな風だから、私の本を送ってくれるならばきっと主人と奪い合いになるだろうとの

ことである。勿論私は約束通りこのつぎ出る著書を忘れずに彼女にも送るつもりである。日本語の活字という活字にもう飽き飽きさせられているこの国から、奇特的な夫妻に宛てて、おそろおそろ小包にして送るつもりである。私の書いたものがそんな二人の精読に堪えるか、愛読に値するかはひとまず措くとして、である。

「奥様と二度目の新婚旅行に（？）スペインにいらっしゃるご予定はないのですか？」とＴさんは親切にも書き添えてくれているけれども、今のところそれはちょっと無理のようである。変哲もない暮しをしているとは申せ、その無変哲も仲々やり過すのに苦勞しているのが実情だから。

三

さて、Ｔさんも書いていた、人間の雑沓する、物価の高い日本列島の上にもまた夏が来た。朝っぱらからドン、ドン、ドンと太鼓の音、ウォーッという関の声が海辺の風に乗って流れて来て、「ことしもやってるな」と思う。高校野球の地区予選というものである。

さいわい雨も上がったようで、しかしながら机に向う気分でもない。そこへあのドン、ドン、ドンが聞えてくるから、家にくすぶっていたって仕方がない、一寸見て来ようという気になり、行けばいつのまにか引き込まれてゲームの終りまで、ついでに次の試合もということになる。

あくる日もまた覗きたくなる。大抵外野の芝生で只見であるが、たまには金を払って内野席に入る。お蔭で人より一と足先に顔や腕や脚（半ズボンだから）が日焼けするのである。

私は甲子園のプレーはテレビで見て巧いのに感心もするけれども、反面何か見え透いていて心配になる。あまりによく仕込まれた動物の芸でも見るようで、選手達の忠誠心も型通り、監督の統率力とやかも型通り、したがってチーム全体の一所懸命が型通り、大会の空気そのものが拵えもののようで、本来のスポーツ精神とは大分違うものを感じる。そんなこともあって私は地区予選のファンなのである。こっちのほうがどのくらい面白いかわからない。

失礼だがどう転んでも甲子園の土とは縁がなさそうな弱小チーム同士が泥んこで鎬を削り合っているのを見ると、これが本当の高校野球だ、甲子園のショーとは全く別物だと嬉しくなる。また万一間違ってそういう心細いチームが甲子園まで行ったとしたら、それこそ真の快挙である。

わが神奈川県下にもスター級の大選手を擁する強豪校がいくつかあるようだが、私がサンダルばきで自転車で出かけて行く海辺の球場へはそういうチームはめったに来ない。大半はどんぐりの背比べで、ずば抜けた選手もないみたいだ。原なんていう姓はありふれているから、無名の小柄な「原くん」がチャンスにバッターボックスに立つと観客は軽くどよめくけれども、その原くんは全然頼りにならなかつたりするのである。

自分の母校だから、または自分の子供が世話になっている学校だから等々で応援するのは私

はかえって窮屈である。私はその日行って見て弱そうなほうを応援してやる。でなければ負けているほうを応援してやる。地元の気楽な見物人はみなそうしているようだ。野球のルールも知らない近所の主婦や婆さんが子供や孫と大人しく芝生に坐っている。主人の観戦中、公園の立木につながれている犬もある。

応援合戦が一つの見ものであるのは甲子園と同じくだが、あれほど大集団でもなし、テレビ向きでもない。大量の生徒を動員して相手方を圧倒する学校もあれば、はなはだ小人数で必死に声をからしている学校もある。女子の悲鳴をまじえた色どり華やかな一団に対するに、男子校の肅々として何やら恐ろしげな黒ずくめの一隊という取合せもある。チアガールの衣裳や振付け、ブラスバンドの編成や演奏からも何となくその学校の雰囲気が想像される。どこのバンドもやるあの景気づけのマーチも、それぞれにアレンジが違っていて面白い。野球のほうはどうもという学校が、時に目も覚める名演奏を披露したりすることがある。

私がとりわけ好きなのは、勝敗決してのち両校応援団がやるエールの交換である。あれはまことに清々しくていい。あれには面倒な作法があるようで、映画でヤクザが仁義を切るみたいに「お控えなすって」という恰好をして、受けるほうもそれに準ずる。団長の口上にも決まりがあるようだが、おおむねひどい腹れ声の上に、その声が風にちぎられて聞きとれない。そうしてあちらとこちら、やりとりの合間々に「おッす!」という例の威嚇的挨拶が入る。甲子園では時間もないから、あんな御大層なことはやらせまいと思う。私はこれが見たいので、い

つも一番最後まで残っている観客の一人である。そしていつも決って「うむ、仲々悪くない」と感心するのである。

球場で見る限りでは、今の高校生が新聞雑誌で書き立てられるほど悪質な分子ばかりとも思われない。知合いの高校の先生が、授業中めちゃくちゃ隣とお喋りしている女生徒を注意したら、「うるさいわねッ」と逆に叱られてしまったと言っていたが、その子にしてもふだん一対一になれば気のいい、人懐っこい所も十分ある子だそうだ。彼等の「そんなこと、どうだっていいじゃん！」や、「訳のわかんねえこと、ぐちょぐちょ言って、もうアッタマに来ちゃうよウ！」や、「パープリンなことばっかし言うんで吹き出しちゃったア！」なんていう科白ももっと親身に聞いてやらないといけないのかもしれない。

大体、教室でもちゃんと前を向いている生徒はごく少数で、うつ伏して居眠りするか、横向きで私語するか、鏡を出して髪を梳かすか等しているそうだ。全員が黒板のほうを向いてお行儀よく坐り、先生は一段高い所から物を教える、そういう時代はすでに去ったかもしれない。

四

八月一日の夜半過ぎに台風が通った。毎度のことながら久しぶりにこれは凄かった。雨中、多くのものが吹きちぎられ、へし折られ、投げ飛ばされ、宙に舞った。——と、この目で見て

いたように言うけれども、そうではない。外へ出て見物できるものなら喜んでそうしたろうが、
事實は一步も家から出られぬ状態であつた。

拙宅裏手の隣家との境になつてゐる細い通路が、いわば迷い込んだ嵐の通りみちになり、ま
ず勝手口の木戸を吹きとばした。そこらに積んであつたビール壘や何かがつぎつぎと碎け散る
音がした。よそから飛んできた物体も、その風のトンネルをまっしぐらに転がって行く気配で
ある。痛い目には会いたくないから私は家の中でただ聞き耳を立ててゐた。何がどうなつたか、
どこがどうなつたかは、つぎの日起きて見ないことには見当もつかない。

天から降つて来たものの中には鳥の巢もあつて、おやおやと思つた。嵐の最中には、「いま
ごろ鳥はどうしているだろう？」などとは考えもしなかつたから。そして鳥の巢が落されたか
らには中にいた鳥の雛も落ちたのである。現に雀の子が二羽、地上に投げ出されてゐた。一羽
はすでに冷たかつた。もう一羽はかすかに息があるようだったので水を含ませたりしたが、こ
れも駄目だつた。いくらなんでも水気はもう沢山だつたかもしれない。猫が何匹もいることだ
し、死骸は家の者が大急ぎで庭の土に埋めた。

子を置き去りにして親はどこへ行つたのかと思うが、これもあの風では戻るに戻れなかつた
のだらう。巢へ帰る途中でどこぞの屋根か窓に叩きつけられて死んだか、あるいは墜落して気
を失つてゐるところをいち早く猫に食われたかもしれない。雀一羽落ちるのも神の摂理だそう
だから、人間が考えたって仕方のないことだ。

これも天の怒りでかテレビのアンテナをへし折られた家もあったし、ブロック塀が見事というほど整然と横倒しになった家もあった。道はたではコンクリの重しのついた交通標識がひっくり返っていた。重量のあるものでこうだから、軽いものはどこへどう飛んで行ったか、失せ物は二度と見つかるまい。

私のところでは二階の海側の戸袋の蓋をむしり取られた。それから庭と言うほどの庭ではないけれども、木がめっちゃめっちゃにやられた。なかでも惨めだったのはうっそうと茂っていたいぬアカシヤの何本かで、これはあらかた葉を吹き飛ばされて一夜にして枯木のごとくになった。どうでもいい野生の雑木にはちがいないが、私には西日を遮ってくれる天然の日除けみたいなもので、毎夏頼りにしていたのである。梅雨が明けたらその蔭にテーブル、ベンチを据えて夕涼み、ビールでも飲もうと思っていたのも当てが外れた。

そんなわけで、台風一過、私の部屋は温度が急上昇して、猫も敬遠するようになった。それなのに窓の眺めはまるで春先の庭でも見ているようで、怪しいことこの上ない。そうして塩にやられて茶色くなった木の葉が炎天に終日ばらばらと散るさまは早や秋の光景という、異様な取合せである。

ところが駄木には駄木の取柄があるもので、一週間もすると、その枯木然とした幹や枝のいたるところに宿り木か何かのように猛然と芽を吹き、相変らず枯葉を降らせる一方で明るい若葉が簇がり始めた。もう一度春からやり直しというみたいだ。それがまた秋口の台風で一挙に